茶わん祭

「茶わん祭」のゆらい

その昔、末遠（余呉町橋本）という所に、陶器をつくる陶工がいて、その技を神から授けられた報恩感謝の意味から、毎年丹生神社に陶器を奉納したのがはじまりと言われています。

はじまった時期は定かではありませんが、丹生神社の由緒書によれば永歴年間（一一六〇年）のころは既に盛大に行われていたと記されています。

子ども達が主役の稚児の舞と十二の役

中世の面影を今に留めている、「稚児の舞」と「十二の役」は他の祭りではあまりみられないものです。

「稚児の舞」は、棒と笹を持つ「神子の舞」、鈴と御弊を持つ「鈴の舞」、扇と御弊を持つ「扇の舞」などの舞を披露し、舞の拍子方の「十二の役」は、小太鼓、大太鼓、鉦叩き、鼓打ち、ささら擦り、棒振りからなり、中でも棒振りは他地方の祭りにはみられません。

花奴の花傘踊り

「花奴」は、若者が豆絞りの手拭いを被り、長襦袢にわらじ履き姿で花傘を手にし、練り踊ります。

その姿はまさに壮観で渡御道中の花形です。

観客を魅了する山車飾り

祭りの華である山車は、寿宝山、永宝山、丹宝山と三基あり、見る人に物語がわかるように、下人形と宙人形の間に物語にゆかりのある置物、武具、花鳥風物などを陶器の茶わんで巧みに組み合わせて飾り付けます。その技術は、それぞれの山車に選ばれた三人（計九人）の山作りたちだけに代々伝わる門外不出の技です。

山作り達が丹精込めて作り上げた飾りは、見る人を魅了し、あっと驚かせるために、互いに競い合い、地上約一〇メートルもの高さになります。

また、山車の周りには村人たちの宝物である見事な幕が飾り付けられています。

この幕は古く、京都祇園祭や飛騨高山祭りに匹敵する幕だそうです。

祭りに欠かせない祭囃子「しゃぎり」

「しゃぎり」は、笛、太鼓、鉦で構成され、曳山の上で、美しい調べを奏でます。

「しゃぎり」もまた古くから父から子へ、子から孫へと譜面ではなく、「ヒヒトン、ヒヒトン」などの言葉で代々受け継がれてきた音色です。

祭りの頂点「山車支柱取外し」

山車の巡行の間、飾りは、竹竿の支柱で支えられていますが、八幡神社到着後にその竹竿の支柱は、はずされます。

高々と積み上げられた飾りが風にゆらゆらと揺れ、倒れ落ちそうで倒れ落ちない姿に観客は歓声を上げ、息をのみ見守ります。

そして祭りは頂点に達します。

参考資料

・県指定無形民族文化財「丹生の茶わん祭」（丹生茶わん祭保存会発行）

・たかとき川 第28号